

研究 報告

オオバのシソサビダニとモザイク病 —シソサビダニとシソモザイクウイルスの生態および検出技術—

法政大学生命科学部 ^か ^ど ^の ^上 遠野 ^ふ ^じ ^お 富士夫・^た ^た ^ら 多々良 ^あ ^き ^お 明夫・^か ^ぎ ^わ ^だ 鍵和田 ^さ ^と ^し 聡

愛知県農業総合試験場 ^す ^ず ^鈴 鈴 ^き ^木 木 ^り ^よ ^う 良 ^じ ^地 地

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 ^ち ^あ ^き 千秋 ^ゆ ^う ^や 祐也*・^く ^ぼ ^た 久保田 ^{けん} ^じ 健嗣
中央農業研究センター

はじめに

オオバ（青シソ）（*Perilla frutescens* L.）は主に施設栽培により周年生産され、2014年の全国の作付面積は174 ha、収穫量は5,302トンである。主な生産地は愛知県、茨城県、大分県、高知県であり、この4県で全国のおよそ9割を占める（農林水産省、2017）。

オオバのモザイク病（図-1上）は、生産物である葉に葉脈の退緑、黄化や奇形を生じる病害であり、愛知県では1980年代から発生していたと考えられるが、長らくその原因が不明であった。2000年ころからは高知県でも発生が見られるようになったことから、その原因究明のための研究が高知県農業技術センターと農研機構中央農業研究センターにより実施され、新種の植物ウイルスであるシソモザイクウイルス（*Perilla mosaic virus*, 以下 PMoV）がモザイク病の原因であることが明らかとなった。また、調査の過程で、PMoVの媒介虫がフシダニ類の一種であるシソサビダニ（*Shevtchenkella* sp.）であることや、PMoVとシソサビダニは他の主要オオバ生産県でも発生していることが確認された（高知県、2014a；2014b；大分県、2014；2016；愛知県、2015a；2015b；茨城県、2015）。

そこで、2015～2017年度に農研機構、高知県、愛知県、大分県、法政大学により実施された農林水産省農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業において、シソサビダニとPMoVの生態を解明するとともに、これらの検出技術、および耕種的防除と薬剤防除を組合せた総合防

除体系を確立した。また、検出マニュアルと防除マニュアルを作成し、農研機構ホームページより公開している（農研機構 編、2018a；2018b）。

本特集では2編に分けて、前編（本稿）ではシソサビダニとPMoVの生態と診断技術を紹介し、後編では、開発された防除体系と産地での普及の取り組みについて紹介する。



図-1 シソモザイクウイルスによるオオバのモザイク病（上）およびシソサビダニの寄生によるさび症（下）

The Perilla Rust Mite and Mosaic Disease on *Perilla frutescens* L.
By Fujio KADONO, Akio TATARA, Satoshi KAGIWADA, Ryoji SUZUKI, Yuya CHIAKI and Kenji KUBOTA

（キーワード：シソ、シソサビダニ、シソモザイクウイルス、フシダニ類、エマラウイルス、LAMP法）

*現所属：国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門